



# 硫黄島渡島事業

～ 忘れてはいけない～



公益社団法人日本青年会議所  
関東地区協議会

監修：石原 俊  
(明治学院大学社会学部 教授 /  
全国硫黄島島民3世の会 顧問)

# 硫黄島渡島

硫黄島は東京都小笠原村に属し、東京都区部（東京23区）から南に約1,000kmに位置する小笠原諸島・父島から、さらに南方約250kmに位置します。硫黄島に一般の民間人が居住していたのは、1944年の戦時強制疎開までであり、強制疎開前はサトウキビや薬用植物などの農業が主な産業でした。戦前の人口は約1,000人でした。戦後、硫黄島の施政権は米国にありました。1968年に硫黄島の施政権が日本国政府に返還され、現在は海上自衛隊と航空自衛隊の基地があります。一般人は原則として上陸できず、今回の硫黄島渡島事業や、戦没者遺族・旧島民の慰霊・墓参などの機会に、例外的に入島が認められます。2022年8月9日、公益社団法人日本青年会議所関東地区協議会と、公益財団法人日本文化興隆財団との共催で、青少年育成の現地研修と慰霊のため、硫黄島渡島事業は行われました。



# 事業

2022.08.09



① 摺鉢山山頂から眺めた南海岸／② 硫黄が丘／③ 摺鉢山の全景／④ 弾痕の残る壕の入口／⑤ 大阪山砲台／⑥ 医務課壕の遺留品／⑦ 壕への入口／⑧ 船見岩／⑨ 摺鉢山山頂の慰霊碑／⑩ 錆びついた砲架／⑪ 硫黄が丘にて、VRマップの素材となる映像を「360度カメラ」で撮影／⑫ 摺鉢山山頂に咲くランタナ（和名はシチヘンゲ）／⑬ 今なお残る鉄片／⑭ 摺鉢山山頂にて米軍が星条旗を掲げた地点

# 平和の尊さを 後世へと伝えるために

我々、公益社団法人日本青年会議所関東地区協議会は2008年より、  
硫黄島の歴史を次世代に継承することを目的として、  
硫黄島渡島事業を実施してまいりました。

2022年度は8月9日に硫黄島に渡島し、戦没者慰霊祭、視察研修を実施いたしました。

東京都の小笠原村に属する硫黄島は日本の領土主権の範囲ではありますが、  
一般人の渡島は厳しく制限されています。

総務省統計局が2022年5月に発表した人口推計によると、  
戦前生まれの世代は日本人全体の約15%となっており、

渡島が制限される原因となった硫黄島の戦いの歴史の継承が、年々困難となっている現状があります。

1945年の硫黄島の戦いにおいて、日本軍側だけでも、  
93名の島民を含む約2万2,000人の尊い命が失われました。

遺骨収集は進められているものの、未だ1万柱以上の遺骨が収集されていない現状があります。

祖国のため、自らの家族のために犠牲となった方々に対する感謝と敬意を風化させず、  
平和の大切さを次の世代に紡いでいくために、本冊子で学んだことを是非とも、

皆さまのご家族、友人、知人周りに

積極的に伝えていただきたいと思います。

公益社団法人日本青年会議所  
関東地区協議会 国際人育成委員会

委員長 柴崎 雄志

## CONTENTS

硫黄島渡島事業	00
「改めて振り返る、硫黄島の戦い。」   吉川 和篤 (戦史研究家)	03
「硫黄島への渡島記」   野上 武志 (漫画家)	06
講演録:「遺骨収集事業の過去と未来」   浜井 和史 (帝京大学 教育学部 准教授)	10
写真で見る戦前の硫黄島の様子   協力: 奥山 登喜子 (硫黄島島民1世)	12

# 改めて振り返る、 硫黄島の戦い。

## 1945.2.19 - 3.26

解説/イラスト: 吉川 和篤 (戦史研究家)  
©KAZUHIRO YOSHIKAWA



## アメリカに狙われた、 太平洋上の飛び石の島々

若い方々は、硫黄島と聞いてもピンと来ないかも知れませんが。東京から南方約1,000kmに位置する小笠原群島・父島から、さらに南方約250kmに位置する、東西8km・南北4kmほどのこの火山島は、現在一般人が立ち入るはことはできませんが、かつては東京都硫黄島村として1,000名以上の住人が暮らしていました。太平洋戦争末期の1945年2月から翌月に掛けて、硫黄島は日米両軍が激突した史上まれに見る激戦地でした。戦争の緒戦ではマレーやインドシナ半島、フィリピン、インドネシアおよび南太平洋の島々を占領した日本軍ですが、1942年6月のミッドウェー海戦での敗北を境に次第に劣勢となります。そして1943年11月の海兵隊によるタラワ島攻略を皮切りに、アメリカ軍は日本が占領していた島々のなかから重要な拠点だけを次々と攻め落とす「飛び石戦略」を実行しました。1944年7月までに Guam やサイパン、テニアン島などのマリアナ諸島を陥落させたアメリカは、次の目標として、同諸島から日本本土爆撃に向けて出撃するB-29爆撃機の飛行ルートの中に位置した硫黄島を選びます。それは損傷した爆撃機の緊急着陸や護衛のP-51戦闘機の出撃を考慮したものでした。



## 遂に始まった米軍上陸と、 日本軍との激しい攻防戦

この硫黄島占領に向けて、チェスター・ニミッツ提督が率いるアメリカ海軍は「デタッチメント (分断)」作戦を立案、それは第3、第4および第5の3個海兵師団兵力7万名を含めた大部隊で硫黄島に上陸して、一気に島の守備隊を叩く計画でした。対する日本軍は、陸軍の栗林忠道中将が率いる戦車第26連隊を含めた第109師団や第27航空戦隊から成る小笠原兵団 (兵力約1万3,500名) と陸戦隊を含めた海軍部隊 (兵力約7,400名) が守りを固めました。また、島民の大半は本土に疎開させられましたが、100名以上が軍属として島に残留させられました。そしてトーチカ陣地が無数に造られ、地下壕がはり巡らされて島自体が要塞化されたのです。



戦車第26連隊を指揮した西竹一中佐（提供：北海道本別町教育委員会本別町図書館）

## 歩兵や戦車隊による、苛烈な抵抗と極限の奮戦

上陸当初、準備万端で迎え撃った日本軍により大きな損害を出したアメリカ軍でしたが、日本側にも誤算が在りました。それは上陸前の事前攻撃時に栗林中将の命令を無視して摺鉢山に配置した海軍の南砲台8基が射撃を行い、米海軍の艦砲射撃で作戦前にすべて破壊されていたことです。これにより想定された上陸部隊の被害はかなり減り、結果として守備隊が不利になりました。そして兵力では3倍以上で圧倒的な物量を誇るアメリカ軍は、多数の死傷者を出しながらじりじりと前進を続けます。兵团司令部から孤立した摺鉢山に陣取った1700名は頑強に抵抗を続けましたが、米海兵隊は火炎放射器を装備したM4中戦車で個別に陣地を潰したり、地下壕入口をブルドーザーで埋めて上から削岩機で穴を空けてガソリンを流し込んで火をつけるなどあらゆる手段で対抗します。そして2月23日の10時には山頂に星条旗が立てられてその後摺鉢山は陥落、しかしそれまでにアメリカ軍は800名の戦死を出したのです。また、元山飛行場では、精鋭の歩兵第146連隊第3大隊や西竹一中佐が率いる戦車第26連隊第3中隊所属の壕に入れた九五式軽戦車や九〇式野砲が迎え撃ち、激烈な戦闘となりました。そして独立速射砲第12大隊の一式機動47ミリ砲が、近距離からの側面攻撃でM4中戦車を多数撃破します。最終的にすべての戦車や砲は無力化されて27日に残存部隊は撤退しますが、この戦区では33輦のM4中戦車が撃破されました。さらに日本軍による夜間攻撃も繰り返し行われ、29日深夜には第5海兵師団の弾薬集積所が砲撃を受けて大爆発が発生、同師団は弾薬の25%を失います。



九五式軽戦車。戦車第26連隊の部隊マーク「丸に縦矢印」。



硫黄島の戦いを伝える1945年2月22日当時の新聞報道 引用元：(公財)新聞通信調査会

## 硫黄島での戦闘終結と、その後に残された記憶

こうした日本軍の抵抗にも関わらず、上陸作戦開始から9日目の2月28日には硫黄島の半分が奪われています。大本営は栗林中将や兵团将兵に4月末まで持ちこたえることを要求しますが、アメリカ軍は3月までに補給や補充兵員を受けて体制を整えて圧力を加えます。そして155ミリ榴弾砲や多連装ロケット砲、対地攻撃機を投入した鉄の嵐のようなローラー作戦を行い、日本軍の激しい抵抗が展開されていた元山飛行場や南戦区を突破して3月1日には北飛行場に到達しました。その後、戦線は一時停滞しますが日本軍は既に弾薬も水も欠乏しており、8日未明には日本海軍警備隊を含めた800名が切り込み突撃を敢行しますが、十字砲火の反撃を受けて700名が戦死する大損害を出しました。そうしたなか、戦車第26連隊と西中佐は戦車を失いながらも地下壕を通して神出鬼没な攻撃を繰り返し、ときには放棄された敵のM4中戦車に乗り込んで戦車砲

でアメリカ軍を砲撃する活躍を見せています。しかし、徐々に北部に追い詰められた小笠原兵团にも最期が迫ります。そうしたなかの戦闘で西中佐も戦死して、16日には栗林中将も大本営に向けて決別の電報を送ります。そして翌日には大将に昇進して、25日には残存部隊を自ら率いてアメリカ軍の野営地に最後の夜襲を掛けて、大きな損害を与えました。しかし、乱戦の内に栗林大将も負傷して自決したと伝えられていて、26日をもって日本軍の組織的な抵抗は終わりました。この島の戦いでは2万名以上の日本軍将兵が戦死して、軍属であった島民もほとんどが亡くなりました。しかしアメリカ軍も約6,800名が戦死、約2万1,800名が戦傷の損害を受け、死傷者の総数では日本側を上回っています。そのためアメリカ本土でもこの戦いの必要性を疑問視する声が上がった程でした。77年が経過してこの戦争の記憶は日本人の間でも風化しつつありますが、硫黄島の遺骨収集は現在も行われており、日本兵のご遺骨はまだ約半数が島に眠っていることも忘れてはならないでしょう。

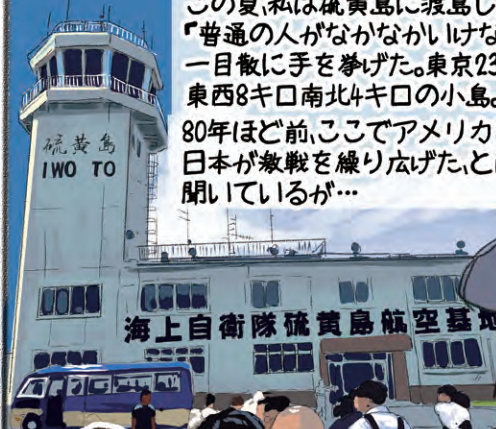
# 硫黄島への渡島記

ここが硫黄島かあー



この夏、私は硫黄島に渡島した。「普通の人になかなか行けない島に行ける」と聞いて一目散に手を挙げた。東京23区から真南に1250kmの東西8キロ南北4キロの小島。ここも東京都だ。80年ほど前、ここでアメリカと日本が激戦を繰り広げたとは聞いているが…

正直、私あまり知らないんだよね…



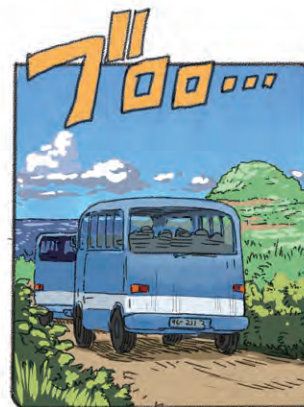
やあ、よくきたね

ようこそ硫黄島へ!



案内の人ですか？  
よろしくお願ひします!

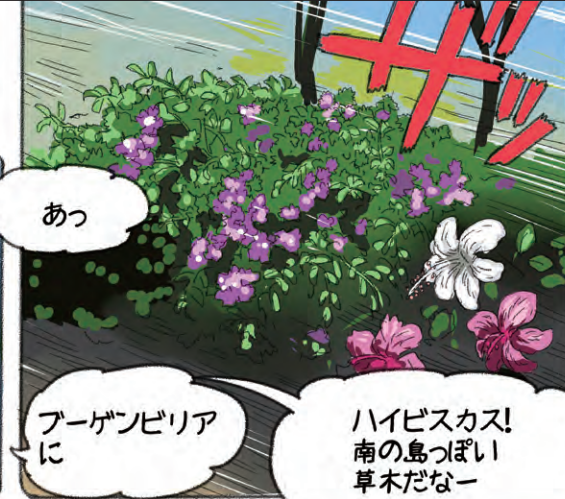
# イケナシ!!!



あっ

ブーゲンビリアに

ハイビスカス! 南の島っぽい草木だなー



パパイヤもあるよ

硫黄島原産の島唐辛子は辛くて有名だね



こんなのかなところで本当に戦争があったの…?

…ああ

昭和20年(1945年)2月19日から米軍は硫黄島への攻撃を開始し、3月26日までの約1ヶ月間組織的戦闘が続いた

硫黄島が米軍の手に落ちると、日本の都市のほぼ全てが、米軍によって空襲され放題になる。

僕たちの家族や大事な人たちを守るため、なんとかしてこの島を守らなければならなかった

1分でも、1秒でも長く…

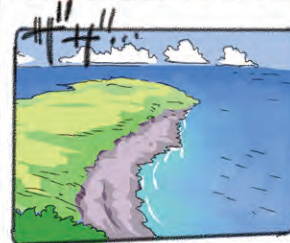
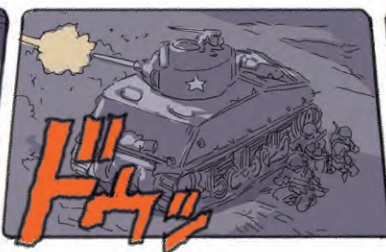
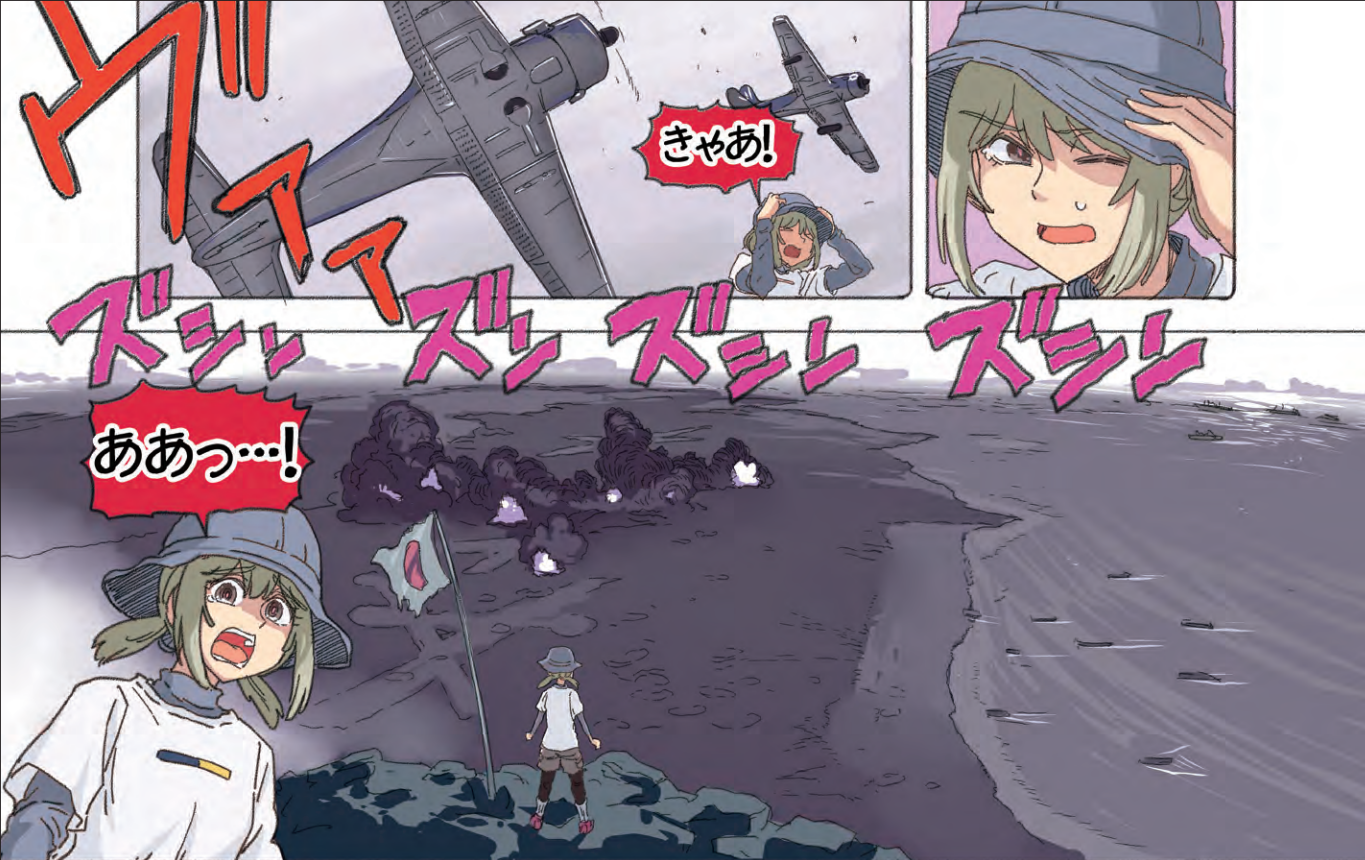


すりばちやま 摺鉢山

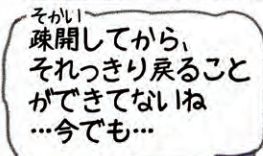
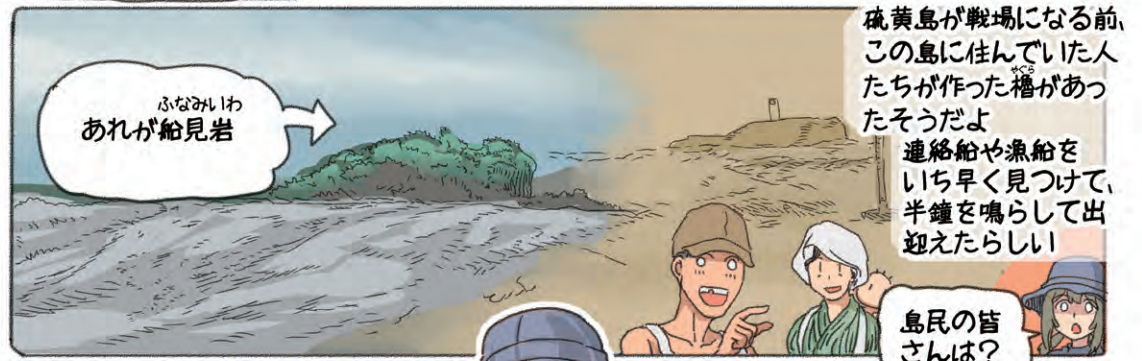


島の全部が見渡せる…こんな小さな島で…?





おおさかやまほうだい  
大阪山砲台



おしまい

# 「遺骨収集事業の過去と未来」

浜井和史(帝京大学教育学部 准教授)

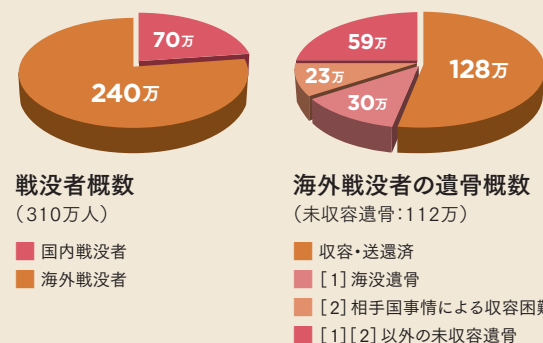
※本稿は2022年度硫黄島渡島事業の前日の2022年8月8日に、事業参加者に向けて行われた講演「遺骨収集事業の過去と未来」のダイジェスト版です。

## 遺骨収集の現状と困難さ

1937年から1945年までの間、アジア太平洋戦争の日本の戦没者数は約310万人とされています。日本本土以外の海外で亡くなったいわゆる「海外戦没者」の数は240万人であり、この数字には硫黄島と沖縄での戦没者も含まれています。これら240万人の海外戦没者のうち、既に収容されて日本に送還された遺骨は128万柱と推計されています。現在もお112万人分が未収容であり、そのうち59万人分の遺骨が収容可能であると考えられています。戦後77年経って、今なお112万人分の戦没者の遺骨が収容されていない。もしかしたらそのことに驚いた人もいるかもしれません。しかし、ここで指摘しておきたいのは、そもそも戦場が広大であり、かつ、それは日本本土から遠方であって、しかも環境的な条件が厳しいところに日本から人員を派遣して遺骨収集を行うこと自体、非常にハードルが高い作業だということです。したがって、収容された遺骨の数を見るだけでは遺骨収集事業を評価することはできません。戦後、日本政府が可能な限り手を尽くして戦没者の手当を行ってきたのかどうか。それこそがこの事業の評価に関わってくるのです。

## 遺骨収集の歴史

海外で戦死した戦没者の遺体を現地で火葬し、その遺骨を本国に送還するという手続きが制度化されるよ



うになったのは、日露戦争(1904-1905)のときからです。その背景としては、せめて亡くなった戦没者の遺骨だけでも、家のお墓に納めたいという遺族の強い思いに応えるということなどが挙げられます。その後アジア太平洋戦争が開戦し、戦局の悪化に伴い、先ほどの戦没者処理は次第に実施困難となっていきます。特に、1943年のガダルカナル島からの撤退、あるいはアッツ島玉砕後においては戦没者の遺骨がほとんど帰らない状態になっていきました。そういった状況に対して、戦場の砂や土、あるいは位牌や遺髪といったものを、遺骨箱、白木の箱の中に入れて、それを遺骨とみなして、遺族に引き渡す。そういう方式が取られることになります。戦時中だけではなく、戦争が終わった後も、遺族のもとへは、そうした空の遺骨箱が続々と届けられるということになりました。しかし、実際には現地に多数の遺骨が残されていました。それをどのように処理するのかということが、戦後の日本政府の課題になっていきます。

## 「象徴遺骨」の収容

1952年にサンフランシスコ平和条約が発効しました。遺骨問題への国民の関心が高まるなかで、日本政府は海外戦没者の「象徴遺骨」を収容するという方針を採用します。この象徴遺骨の収容とは、すべての遺骨を徹底的に捜索して持ち帰ってくるのではなく、戦場に散在する一部の遺骨を持ち帰ってくることで、その戦場全体の遺骨を持ち帰ったものとみなすというものです。太平洋諸島、ニューギニア、ビルマ、インド、フィリピンといった地域に、1回ずつ遺骨収集団を派遣しました。そして、日本政府は1959年に千鳥ヶ淵戦没者墓苑を設立し、収容した遺骨を納めることにしたのです。1950年代における遺骨収集団の派遣というのは、高度経済成長前の日本において限られた予算、人員という制約のなかで実施されたものであり、広大な地域に散在する遺骨を収容するにあたって現実的な方策であったといえるかと思えます。遺骨収集団の派遣は、遺骨の早期収集を願う遺族や戦友たちの要望がある程

度満ち、一定の社会的な役割を果たしたと評価できるかと思えます。

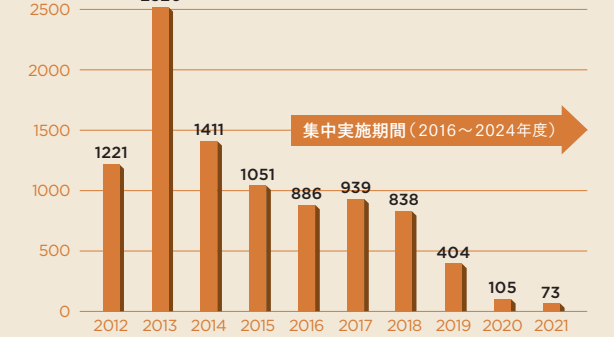
## 遺骨収集への関心の高まり

1964年に日本人の海外渡航、自由な海外旅行が認められるようになります。それ以降、戦没者の遺族や戦友たちが旧戦場を訪問するというのが活発に行われるようになります。そうしたなかで、現地にまだたくさんの遺骨が散乱しているのではないかと、いわゆる「遺骨野ざらし問題」が起こります。政府は戦没者の遺骨を適切に処理していないのではないかと世論が1960年代半ばに高まり、1967年から遺骨収集団の派遣が再開されています。再開された計画的な遺骨収集事業は一通りの地域への派遣が終了したらそれで打ち切るということになっていました。しかし、1972年にグアムで横井庄一さんが見つかったということで国内的な世論がまた盛り上がり、改めて計画が立てられています。1975年になると計画的な遺骨収集事業はまた打ち切られることとなります。しかし、それでも現地にはたくさんの遺骨が残っていますので、それ以降において政府は補完的遺骨収集という位置づけをし、遺骨が発見され次第、その情報に基づいて収集団を派遣するという形をとっています。現在に至るまでその延長線上で遺骨収集事業が続けられています。

## 個人の識別と遺骨の帰還

象徴遺骨という考え方にも示されていたように、戦没者の徹底的な捜索や個人の識別、あるいは遺族への遺骨の返還といったことに対する政府の意識というのは、当初から限定的であったということが指摘できます。収容された遺骨が、いったい誰の遺骨であるのかという個人を特定する努力が追求されずに、現地で火葬して遺骨を持ち帰ってくるということが慣例として行われていました。現地で火葬することは、1日でも早く遺骨を持ち帰りたいという遺族の要望に応える措置として行われていたものですが、収容された遺体のなかには、あるいは遺骨のなかには、日本人のものではないものが混じっている可能性もあったわけです。2019年にシベリア抑留死者の遺骨のなかに日本人以外の遺骨が多数含まれていたということで、大きな問題となりました。その結果、2021年からは、原則として、現地では火葬

遺骨収容数の推移



せずにDNA鑑定の際となる遺骨を持ち帰ることが、新たな遺骨収集の作業手順として取り入れられています。

## 遺骨収集と国際協力

この遺骨収集事業はもはや日本一国だけの問題ではなく、アメリカや韓国など、関係各国とも連携をしながら取り組む必要があります。ギルバート諸島タラワ環礁では、朝鮮人軍属の遺骨が収容され、そのDNA鑑定には日本とアメリカ、そして韓国が関わっています。沖縄では日本、台湾、韓国などの若者たちによる共同作業で遺骨収集が行われました。厳しい環境下の遺骨をDNA鑑定するという経験により、DNA鑑定に関する日本の技術はかなり進んでいます。国際的な技術の共有ということは今後積極的に図っていく必要があるでしょう。

## 遺骨収集の現在と未来

2016年には「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」が成立し、2024年度までを「集中実施期間」に設定して集中的に取り組んでいくということになりました。集中実施期間以降、現地に残されている多くの遺骨をどのように取り扱っていくべきかという問題は、これは今後も日本社会全体が向き合っていかなければなりません。戦後77年となり、今日の遺骨収集活動の主体になっているのは、戦争とは直接関係のない世代です。今後は遺族たちに対する感謝というものを超えて、なぜこの遺骨収集を行わなければならないのかという問いに立ち返って考える必要があるように思います。

浜井和史●帝京大学教育学部准教授。主な研究テーマは、戦後処理問題、旧帝国園における日本人戦没者の遺骨処理問題など。近著に『戦没者遺骨収集と戦後日本』(吉川弘文館)。

# 写真で見る戦前の 硫黄島での生活の様子



今回、旧島民の奥山登喜子さんに取材のご協力をいただき、戦前の硫黄島での生活の様子を収めた家族アルバムをお見せいただきました。奥山さんは硫黄島で生まれ育ち、11歳のときに戦争によりご家族と本土へ疎開し、ふたりのお兄様が硫黄島に残り戦死されています。

奥山さんは今回の取材を通して、決して再び戦争が起こらないようにしてほしい、ふたりのお兄様を含めた戦没者の遺骨収集を進めてほしい、そして旧島民同士で島内で一緒に過ごす時間がほしい、とおっしゃいました。

協力：奥山 登喜子 インタビュー：滝口大志 写真リマスター：石引 卓(石引写真館)



▲お正月、お友だちとみんなで着飾って。

▼奥山さんと姉妹たち。



◀左 | 尋常小学校では出し物で盛り上がりました。右 | 硫黄が丘。吹き出す蒸気でサツマイモを茹でて、おやつにして食べました。



▲島内で開催されていた草野球の記念撮影。奥山さんのお父様もよく草野球をされていたとのことでした。



▲島内の海岸線にあった温泉に入って。



▲休日の「浜焼き」の様子。目の前で獲った貝を温泉で茹でたり焼いたりして食べました。



◀奥山さんが大切に保管している修復前の家族アルバム。疎開のとき、これだけは大切に持ち出したそうです。





硫黄島に咲くランタナ（和名はシチヘンゲ）

# 硫黄島渡島事業

～忘れてはいけない～

発行：2022年11月

発行者：2022年度 公益社団法人日本青年会議所  
関東地区協議会 国際人育成委員会

監修：石原 俊（明治学院大学社会学部 教授／全国硫黄島島民3世の会 顧問）

表紙イラスト：吉川 和篤

## 国際人育成委員会

兒玉 康智（副会長）／柴崎 雄志（委員長）／滝口 大志（副委員長）／祖父江 好美（副委員長）／佐藤 賛（副委員長）／中原 佑樹（総括幹事）／小内 大河（運営幹事）／峯川 有花／柳澤 弘利／長澤 元樹／中山 秀幸／宮下 良友／武田 匡哉／西田 彬宏／戸野 晏奈／石川 哲也／境 亮一／平野 大太／犬飼 雄亮／井上 昌人／植木 将夫／荻野 稔／桑野 裕雄／佐藤 宏明／島田 健一／菅原 利成／須藤 いづみ／都築 宏友／前田 地生／森田 紗緒里／柳 大樹／山内 圭輔／相原 貴弘／浅見 友章／川森 洋佑／中川 翔子／西木 健太／菅野 潤／外川 隆司／田中 寿興／小長井 雅史／森 大樹／小竹 隼人／指田 剛直／佐々部 彰宣／河野 翔太／木村 惇／長田 祐美



公益社団法人日本青年会議所  
関東地区協議会